

世界に目を向け、未来を見つめる。

[ボイス・オブ・ライフ]

2026. SPRING

# VOICE OF LIFE

Take Free

# 11

## ガザから 引き離されて 避難先でも続く不条理

取材／安田菜津紀・佐藤慧

COVER PHOTO

エジプト郊外の集合住宅。カイロ中心地は物価も高く、ガザからの避難民の多くは家賃の低い郊外に身を寄せている。



Dialogue for People

# ガザから

## わずか6時間の距離で続く惨劇

「目が覚めたとき、隣にいた友人が『お悔やみを——』と言いました。その瞬間に、自分の家族に何が起きたかを知り、絶望的な衝撃を受けました」

ガザの自宅で激しい爆撃に見舞われたマハディさんは、2ヵ月もの間、完全に意識を失い昏睡状態に陥っていた。意識のないまま病院から病院へと搬送され、手術のためにエジプトへと越境した。

マハディさんのスマートフォンには、病院のベッドで横たわる自身の映像が残されていた。いくつもの管につながれたその体には、いたるところに深い傷が刻まれている。ほかの動画には、家族の変わり果てた姿も映し出されていた。

父、母、8人のきょうだい、そして幼い娘2人が殺害された。瓦礫の下敷きになり亡くなった家族もいれば、20メートル近く離れた

る。経済的にも先行きが見えない。「それでも——」とファイダーさんは言う。

「立ち止まっている時間はありません。私は今、子どもたちの未来のために生きています。そしていつか必ず、平和になった故郷に帰ることを夢見ています」

## 希望の糸をつむぐ女性たち

「脱出時、家族は恣意的に引き裂かれる」という証言に、取材中幾度も触れた。

数々の困難を越えてガザ南部の検問所にたどり着いても、「男性は通さない」とはねられてしまうことがあるのだ。運よく通過できても、就労許可も得られない無力感から、鬱になったり、苛立ちを募らせたりする男性も多いという。そしてときに、そうした苛立ちが女性に向かうこともある。アラール・アル・ハッタードさんは、そうした孤独や無力感、ストレスなど、様々な重圧にさらされる女性たちのスペースを運営している。

「カイロでの生活は困難の連続で、最初は自分自身の癒やしのために、子どもの頃からの趣味だったパレスチナ刺繍を始めました。刺

大通りまで遺体が吹き飛ばされた家族もいた。

「長女は頭に破片が刺さる重傷を負いながらも、しばらくの間は生きていました。親族は『彼女のためにも、早く天国へ行けるように』と語りかけたそうです。苦しみ続

けるよりは、そうなった方が彼女にとって幸せなのだ」と

動画には、全身に包帯を巻かれ、腫れあがった顔を苦しそうにゆがめる血まみれの長女の姿が残されていた。その翌日には息を引き取ったという。生き残った妻と息子は、今もガザ北部に残されている。

「距離的にはガザからわずか車で6時間の距離にいますが、今の状

況では6年、あるいはそれ以上の月日が流れたかのように、遠く感じます」

家族を呼び寄せようと尽力しているが、目は立っていない。

## いつか必ず故郷へ

ファイダー・ファドルさんは、エジプトの首都カイロ郊外、集合住宅がひしめく一角で3人の娘と共に避難生活を送っている。

ガザの自宅が爆撃を受けた際、ファイダーさんは頭蓋骨が割れるほど頭を打ち、左目にも重傷を負った。緊急搬送されたエジプトで複数回にわたる手術を受けたが、左目の視力は失われた。

「何より辛かったのは、娘たちと離れ離れになったことです。爆撃の続くガザで、娘たちの身に何かあったらと思うと耐えられませんでした」

ファイダーさんは入院中にもかかわらず、点滴以外は水も飲まないハンガーストライキを決行した。「子どもたちをガザから脱出させられないのなら、ガザに戻って共に死ぬ——」。その必死の訴えに関係者が尽力し、娘たちがガザ南端の街、ラファを通過してファイダーさんの元に戻ってきたのは、検問所がイスラエル軍によって「制圧」され、閉鎖されるわずか数日前のことだった。

爆撃の記憶は子どもたちに大きなトラウマを残している。飛行機や雷の音にもひどく怯えるという。幼い娘たちはパレスチナ自治政府が運営するオンライン授業を受けているが、停電や不安定なネット環境にも悩まされてい

## 避難先でも続く不条理

## VOICE OF LIFE



【右上】マハディさんが見せてくれた家族の写真。【右下】左目を失明したファイダーさんは、ガザからの避難民の支援活動も行っている。【左上】刺繍によるメンタルケアの重要性を語るアラールさん。

續に没頭することで現実の苦しみから離れ、心を整えることができた経験から、私は『Threads of Hope』希望の糸」というプロジェクトを立ち上げ、同じように避難してきたガザの女性たちのコミュニティを作りました」

困難に満ちた日々を送る女性たちにとって、こうして一時的に

でもその環境から離れ、互いに言葉を交わせる時間は貴重なものだった。

パレスチナ刺繍は、地域によって色彩やパターンが異なる。たとえば「ネックレス紋様」という特徴的な刺繍がある。かつてネックレスを

買うことができなかった人々が、胸元に刺繍でネックレスを表現し

たのだと、見本をめくりながらアラールさんは語る。

「イスラエルが私たちの伝統を奪おうとする中で、パレスチナ刺繍は歴史や土地の物語を継承し、アイデンティティを守るための大切な手段なのです」

## 虐殺に加担する日本政府

「これが祖父母たちが経験したナクバなのだと痛感した——」。そんな思いを語る人は少なくない。「ナクバ」とは、シオニズム(ユダヤ人国家をパレスチナの地に建国しようとする政治運動)に伴う占領や侵攻によって、約70万人以上のパレスチナ人が土地を追われ、難民となった出来事だ。ガザでの虐殺は突如として始まったわけではなく、連綿と続く差別や植民地主義の延長線上にある。ガザ地区の人口の約7割が、イスラエル建国の過程で故郷を追われ、難民とならざるをえなかった人々やその子孫といわれている。

ある女性は、90代の祖母が「ナクバ」を経験し、ガザで暮らすようになったと語る。ところが軍事侵攻によって再び焼け出され、最後には「せめてガザの家で死にたい」と言いながら、瓦礫に囲まれたテントで亡くなったという。パレスチナの人々にとって「ナクバ」は過去の事象ではなく、現在進行形で続いている暴力なのだ。

そして日本政府もまた、イスラエルの軍需産業に深く関わってきた。際限のない暴力に歯止めをかけていくのは、市民の声や行動だ。

取材 安田・佐藤

取材



安田 菜津紀 Natsuki Yasuda

中東、東南アジア、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地の記録を続ける。TV、ラジオ番組などにもレギュラー出演中。



佐藤 慧 Kei Sato

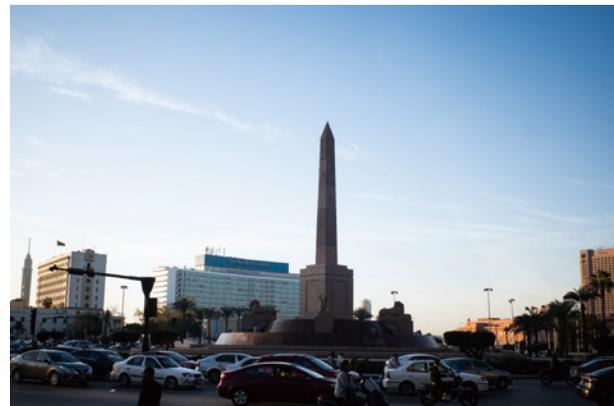
アフリカや中東、東ティモール、自然災害の被災地などを取材。世界を変えるのはシステムではなく人間の精神的な成長であると信じ、紛争、貧困の問題、人間の思想とその可能性を扱う。

# ガザからの避難民が置かれている状況

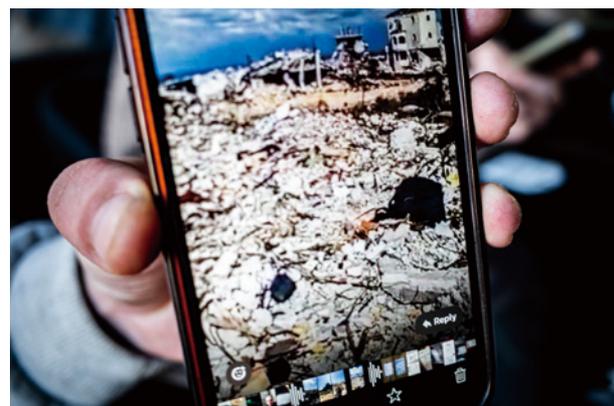
ガザでの虐殺が加速して以降、ガザ地区最南端の街ラファの検問所から、医療的な緊急ニーズのある人々のほかにも、何とかエジプトへの越境を試みる人々がいました。越境手段のひとつをあげると、カイロに本社を置く、とある会社に「調整」料金を支払うというものです。金額は吊り上がっていき、大人ひとりあたり5,000米ドル、子どもはその半額が要求されていました。同社はエジプトの諜報機関や軍と強いつながりがあり、汚職の温床になってきた疑いが指摘されています。しかしイスラエル軍がラファを制圧して以降、越境は非常に困難となっています。重傷者の「許可」も追いつかず、WHOの発表によると、2024年7月から2025年11月にかけて、待機中に少なくとも1,000人以上が亡くなったとしています。

学生ビザ保持者など一部の人々を除けば、ガザからの避難者は短期滞在しか認められず、居住許可証を得られていません。公的福祉の利用や銀行口座の開設など、日常に不可欠な権利が制限されたままなのです。

エジプト政府側には、「ハマス関係者」が紛れ込むことへの警戒感や、財政難の中でスーダンやシリアなどからの難民・移民を受け入れてきた経済事情などもあります。しかしとりわけ大きいのは、1979年にイスラエルと「和平条約」を締結して以降、米国からの軍事・経済的援助に大きく依存してきたという背景です。そうした「政治的意図」も重なり、確かにエジプト政府はガザの人々を冷遇していますが、これが「エジプトの全責任」であるかのように語るのは本質ではなく、むしろイスラエル側のナラティブをなぞってしまうことになりかねません。根本原因は、占領とジェノサイドを続け、人々が意に反してガザから避難せざるをえない状況を作り出した、イスラエル側にあることは明白です。



カイロ中心地のタハリール広場は、「アラブの春」など権力に抵抗する市民の舞台となってきた。



完全に瓦礫と化した故郷ガザの写真。避難民の多くがトラウマや生き残った罪悪感を吐露する。

写真展  
から1枚

## PHOTO EXHIBITION 「パレスチナと猫」写真展

写真家の高橋美香さんと安田菜津紀、佐藤慧による写真展を開催しています。2024年8月から全国を巡回してきた「パレスチナの猫」に続く第2弾です。イスラエルの占領により、パレスチナの人々は日々不条理を突きつけられています。この写真展は、日本でも身近な「猫」を通じて、その「日常」を伝えたいと思いを企画しました。猫たちが歩き、走り回り、寝転がる土地で何が起きているのか、考えてみませんか。



「パレスチナと猫」写真展

開催情報は [こちらから](https://d4p.world/news/33163/) <https://d4p.world/news/33163/>



聖地の集まる旧市街の入口にはイスラエル警察による監視所が設けられている。猫には優しいイスラエル警察も、パレスチナ人には容赦なく暴力をふるう。

### D4P職員のつぶやき

庭野 登紀子 / D4P広報部



昨年に第25回デフリンピックが東京で開催されました。私は先輩スタッフと一緒に競泳を観戦し、日本代表選手のメダル獲得の瞬間を目の当たりにしました！メディアでも取り上げられ、大会や手話ろう者についての認知度は上がりましたが、一過性の「流行り」になってしまうのではと懸念しています。これからも発信の持つ影響力や意義について考えながら様々な方法で「伝える」活動を続けていきます。次号もよろしくお祈りします。



Dialogue for People

認定NPO法人 Dialogue for People (ダイアログ・フォー・ピープル/D4P)

国内外の様々な地域で社会課題の渦中にある人々取材し、写真や文章、映像などさまざまな表現を通じて、「伝える」ことを主軸に活動するメディアNPOです。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え、自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

d4p

検索

<https://d4p.world>

D4PのSNS一覧は

[こちらから](#)



各地での取材をYouTubeで配信！



毎週水曜に安田菜津紀と佐藤慧が、気になるニュースや出来事をラジオ形式で配信。ゲストを迎える回ではインタビューを交えながら、様々なテーマを深掘りしていきます。

D4P YouTube Channel YouTubeで検索！

d4p

検索

